綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 2 集

平成9年度国庫補助事業報告書

快天山古墳
椎尾東遺跡
西長尾城跡

1998. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代後半から古墳時代前半にかけては、発掘調査等によりかなり密度の高い内容であることが確認されています。

町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査をして古代の生活等を明らかにすると共に遺跡を保護し、後世に伝えることは私達の使命であると考えます。

綾歌町では、昨年度より国庫ならびに県費の補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施した成果としてこの報告書を発刊するに至りました。

今年度は、栗熊東住吉地区に所在する古墳時代前期に築造された快天山古墳の東に隣接する土地で、宅地開発に伴い遺跡の分布確認試掘調査を実施した結果、快天山古墳の関連遺物であると考えられる埴輪片を含む遺物包含層の分布を確認しました。

また、岡田東椎尾地区では、町の行う農村公園整備事業に附帯する浚渫工事に伴って実施した試掘調査によって椎尾東遺跡を新しく発見しました。

内容としては、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての所産と考えられる竪穴住居を１棟検出したのみで遺跡内容の詳細までは確認できなかったが、次年度に予定されている発掘調査でのさらなる解明に期待が寄せられます。

さらに、昨年度から実施している岡田上国吉地区での中世城郭跡として名高い西長尾城跡分布確認測量調査では、測量基準点を設置したことにより測量成果を後の調査に活用できるようになりました。

今年度の平板測量範囲は広くなかったものの、基礎資料の整備は着実に進行していると考えられます。

今後についても、身近に所在する貴重な文化遺産を後世に伝えていく過程として調査の成果が重要な資料として活用されることを望みつつ、当該事業の継続を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査にあたりましてご理解とご指導をいただきました県教育委員会文化行政課をはじめとする関係各位、また調査にご協力と援助をいただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

平成１０年３月３１日

綾歌町教育委員会教育長　西浦廣海

例　　言

1．本書は、綾歌町教育委員会が平成９年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。

2．今回の遺跡発掘調査事業は、快天山古墳、椎尾東遺跡、西長尾城跡の３地区を対象とした。

3．発掘調査、遺物整理、実測及び本書の執筆、編集は、綾歌町教育委員会主事近藤武司が担当した。

4．本書の実測図の縮尺は全てスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は、快天山古墳及び椎尾東遺跡については磁針方位で、西長尾城跡については国土座標第Ⅳ系による方位で示した。

5．出土遺物及び図面は綾歌町教育委員会にて保管している。

6．快天山古墳試掘調査にあたっては國木健司氏、椎尾東遺跡試掘調査にあたっては塩崎誠司氏の助言・協力を得たので、ここに記して謝意を表する。

7．挿図については、国土地理院の２５，０００分の１地形図を調製した綾歌町管内図（承認番号　四複第１３４号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目　　次

本 文 目 次

第Ⅰ章　平成９年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要・・・・・・・・・・・・1
第Ⅱ章　快天山古墳試掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　　3．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　4．調査結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第Ⅲ章　椎尾東遺跡試掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　3．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　4．調査結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第Ⅳ章　西長尾城跡測量調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　　3．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　　4．地形の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第Ⅴ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

挿 図 目 次

第１図　平成９年度綾歌町内発掘調査事業対象地・・・・・・・・・・・・3
第２図　快天山古墳墳丘略測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３図　１トレンチ土層実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第４図　快天山古墳試掘調査トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　周辺の遺跡分布状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第６図　１トレンチ土層実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第７図　１トレンチ平面略測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第８図　椎尾東遺跡試掘調査トレンチ配置図・・・・・・・・・・・・・・16
第９図　西長尾城遺構配置概略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第10図　今回までの調査範囲遺構分布状況・・・・・・・・・・・・・・・20
第11図　西長尾城遺構測量図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

表　目　次

第１表　１トレンチ土層堆積状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
第２表　試掘トレンチ総括表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
第３表　遺構一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３

図　版　目　次

図版１　快天山古墳墳丘全景（北より）・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版２　１号石棺露出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版３　試掘調査作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版４　包含層検出状況（１トレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版５　土層堆積状況（１トレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版６　試掘トレンチ全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
図版７　試掘調査作業風景（６トレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版８　竪穴住居検出状況（１トレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版９　１トレンチ全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版10　１トレンチ土層堆積状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版11　竪穴住居焼土分布状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版12　４トレンチ全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
図版13　本丸・第14郭遠景（北より）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図版14　伐開作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図版15　基準点測量風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図版16　平板測量作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図版17　第14郭（東より）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
図版18　竪堀・堀切・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

第Ⅰ章　平成９年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

昨年度から国庫及び県費補助金により、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しているが、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助申請については、平成９年５月30日付けで提出し、平成９年８月22日付けにて交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成９年５月30日付けで提出し、平成９年８月27日付けで交付決定を受けた。

今年度については、古墳時代前期に築造され、主体部に日本最古の刳抜式割竹型石棺を３基埋蔵するとして著名な快天山古墳の分布確認試掘調査及び近年になり次々と遺跡が確認されている仁池付近での椎尾東遺跡の遺構確認試掘調査、さらに昨年度より実施している中世城郭として町南部連山の城山に位置する西長尾城跡の測量による分布確認調査と３件の調査を実施した。

快天山古墳分布確認試掘調査については、隣接地に個人住宅の建設が計画されたことに伴い、町教育委員会としては附帯工事として実施される宅地進入道路の路線等にも細心の注意をはらいながら開発側との協議を慎重に進めた。

しかしながら、住宅建設予定地の状況についても町教育委員会として快天山古墳の規模等、協議に使える十分な資料を備えていなかったため、1,000㎡の対象地内においてトレンチによる試掘調査を実施することにした。

この結果、建設予定地内には遺構の分布を確認することができなかった。

しかし、一部で包含層が確認でき、快天山古墳のものと考えられる埴輪片及び土師器片等が検出されたことから、かなり近い範囲まで快天山古墳の兆域が及んでいることを裏付ける資料を得ることができた。

椎尾東遺跡分布確認試掘調査では、昨年度の発掘調査等により北原遺跡、椎尾遺跡というようにほとんど地理を共にする地区で遺跡の確認がされていることから、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、事前に調査に踏み切ることにした。

上記の北原遺跡、椎尾遺跡については、香川県の実施する緊急農道整備事業に伴い不時発見された遺跡であり、この椎尾東遺跡についても同事業に関連して町が実施する農村づくり事業に伴う池の代替施設として浚渫工事を実施することになり、その事前調査によって発見された遺跡である。

試掘調査の結果、2,478㎡に及ぶ調査区域の中の南西部で弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての所産と考えられる竪穴住居を１棟検出した。残存状況も非常によく今後の調査によって貴重な資料を得ることができるとして保護範囲とした。

また、残念ながら地元との交渉により竪穴住居を検出した付近で未調査となった部分があるので前述の範囲と合わせて約207㎡について遺構分布の可能性があるとして保護措置の必要な範囲とした。

西長尾城跡測量調査については、昨年度より実施している遺構分布状況の確認を主体とした平板による測量を継続して実施することとした。

今回は合わせて、測量基準点を設置したことにより、より精度の高い測量図を作成できるようになった。

今回の調査では、伐開こそ約3,000㎡程実施したが測量範囲は、本丸からの西側の一段下に所在する郭にかけての約790㎡と昨年度調査した連郭式郭列の最下段に配されている堀切部分の約420㎡の合わせて約1,210㎡であった。

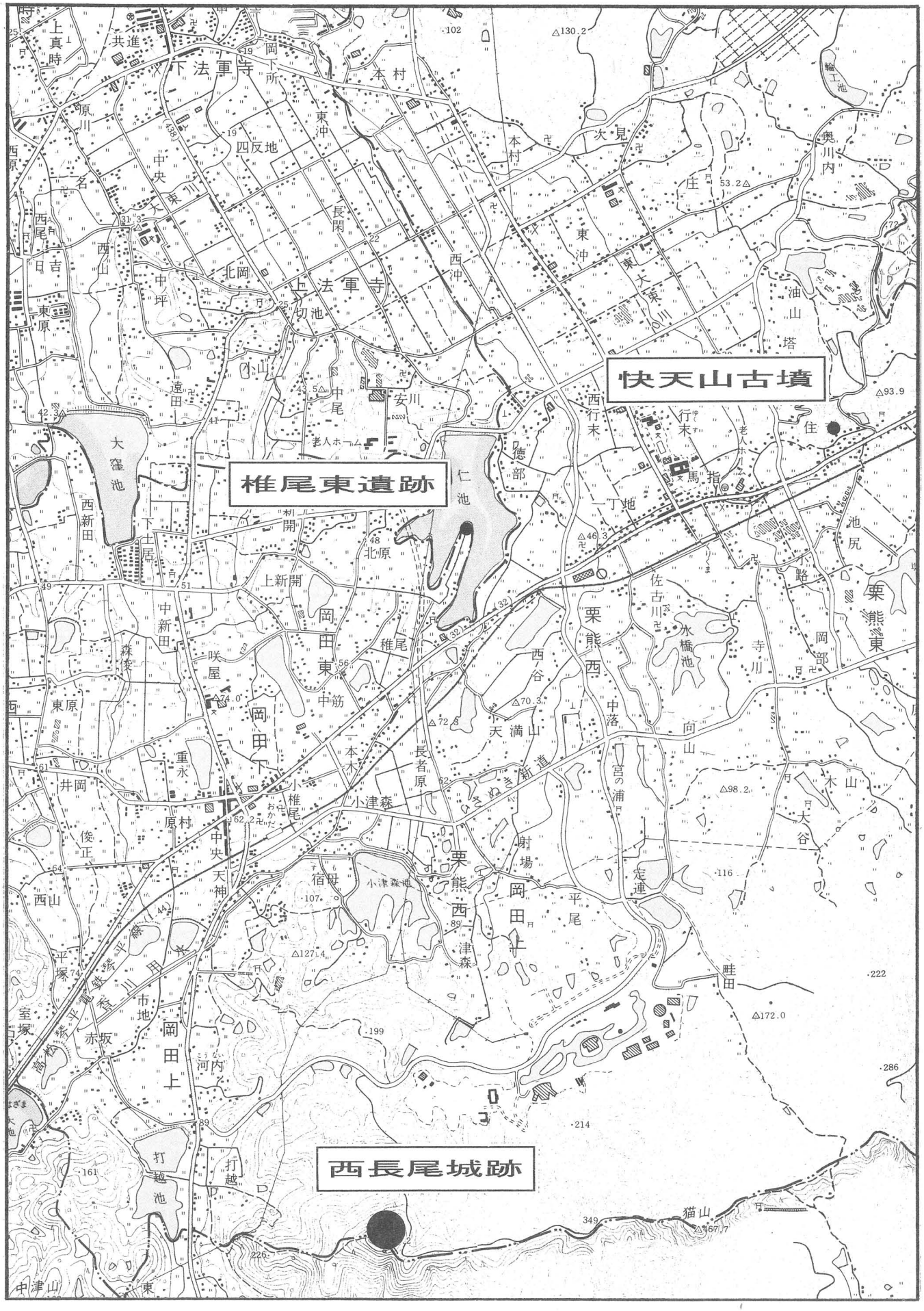
基準点測量を委託としたため、平板測量に対する予算が乏しくなり調査面積は昨年に比べるとかなり狭まったが、昨年度の測量成果も修正することができたため、資料としては非常に充実したものになった。

昨年度と今年度の調査により、本丸付近及び本丸から北側に延びる2筋の尾根のうち、東側の尾根部分についての調査を実施したので、次年度以降については、西側の尾根筋へと調査範囲を広げて西長尾城の構造を明らかにしていきたい。

以上、町内3ヶ所にて確認調査を実施し、調査総面積は4,688㎡であった。

平成9年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成9年7月5日より実施し、平成10年3月31日に終了した。

第１図　平成９年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



快天山古墳

第Ⅱ章　快天山古墳試掘調査

調査対象地　　綾歌町栗熊東字若狭９１１番地１
調 査 期 間　　平成９年７月５日～７月６日
調 査 面 積　　１０５．７㎡

１．地理的環境

綾歌町は、香川県のほぼ中央に位置し、高見峰、猫山、城山の連山を南限とし、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は横山連山を境に坂出市と接しているため眺望は遮られている。一方、北西部は土器川地域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発した大束川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっている。

このように、綾歌町では地形・気候・水利にめぐまれ、生活するには非常にすぐれていることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどりつくことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。さらに、大束川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察される。

快天山古墳は、綾歌町東部の横山連山から南に派生する尾根の最南端にあり、大束川及び綾川両水系の平野部を東西方向に見下ろす位置にある古墳時代前期に築造された古墳である。付近には、薬師山古墳、住吉神社古墳等が所在するが、詳細な内容や時期が判明していない為、お互いの相互関係については不明である。

２．歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により、行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構の確認までには至っていないものの、遺物の採取量からみても当該期には、既に人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代に入ると次見遺跡、行末遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、下土居遺跡、佐古川・窪田遺跡といった集落遺跡が確認されている他、墳墓としても平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が確認されている。

また、佐古川・窪田遺跡では、弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された大規模な周溝墓群が確認されている。

古墳時代に入ると、集落遺跡は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡でわずかに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

快天山古墳、陣の丸古墳群に代表されるような有力墳が尾根上に築造されたり、岡田台地上には車塚を中心として数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される。岡田万塚は早くからの開墾等によりほとんどが消滅しており、現在その姿を残しているの

はわずか6基となっている。

古代については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡で集落跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造されたり、中世後半期には南部連山の城山で長尾大隅守元高が西長尾城を築造し、高見峰山塊にも栗隈城を築くなど、豊臣秀吉の征伐により滅ぼされるまでの二百年余り、その一族が勢力をほこっていた。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も多く発見されている。

3．調査に至る経緯

綾歌町栗熊東住吉地区に古墳時代前期に築造された快天山古墳が所在する。

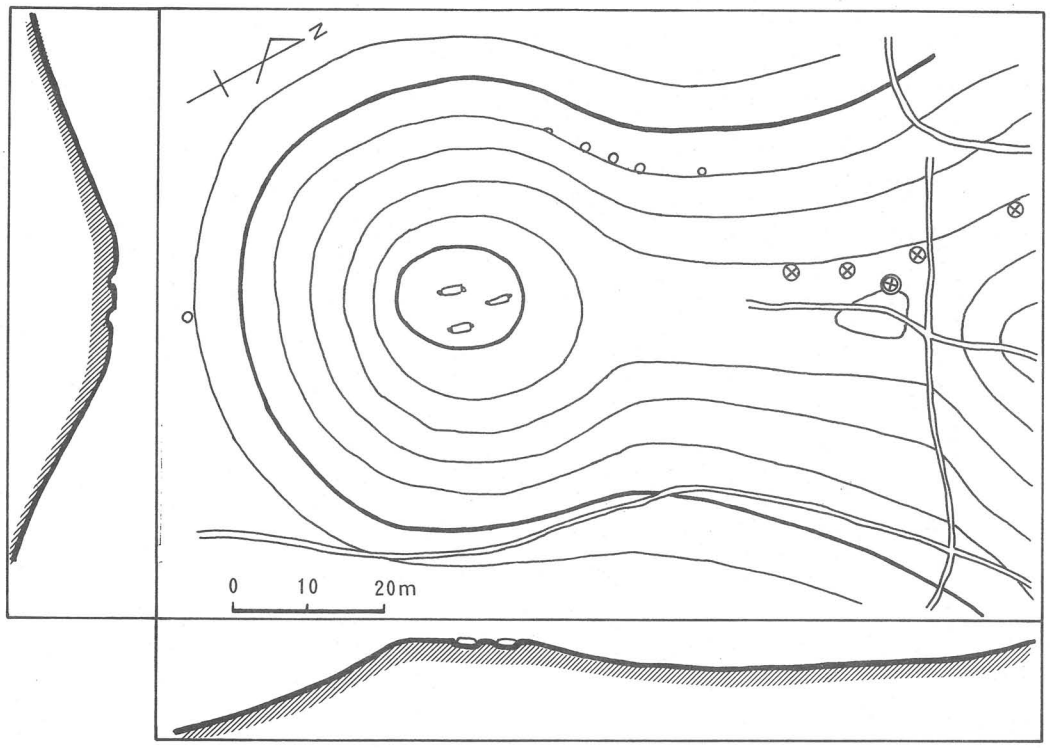
快天山古墳は、昭和25年7月に香川県名勝天然記念物調査委員会により、また昭和26年3月には京都大学考古学教室により発掘調査がなされている。

当時の調査によると、角閃安山岩の刳抜式割竹型石棺3基を主体部に持つ後円部径65m前方部長さ35mの規模を誇る前方後円墳と報告されている。

後円部の保存状態が悪く、視覚的には形状が判別しにくいため円墳の可能性もあるとされているが、円筒埴輪列の配列から考察しても前方後円墳説が有力であると考えられる。

墳丘規模としては、当時、四国最大であることや、3基ある石棺のそれぞれから鏡、鉄剣、管玉等の副葬品を確認していることからこの地域を広範囲にわたって支配していた権力者が埋葬されていたことを容易に推察することができる。

各石棺を対比してみると、いずれも粘土床の上に置かれているが副葬品の内容から1号石棺の被葬者が他の被葬者よりは権威者であったようである。



○ 円筒埴輪列
⊗ 組合石棺
◎ 鏡出土組合石棺

第2図　快天山古墳墳丘略測図（S＝1：1，000）

この快天山古墳の南部で、個人住宅の建設が計画された。しかし当初の計画では、宅地予定地が快天山古墳に隣接していることに加えて宅地までの進入道路として快天山古墳の前方部と推測される部分に配置される計画となっていたため、教育委員会としては許可できないとして返答したため、一時は建設計画が滞っていた。

その後、まず第１の問題点であった進入道路の件について中心に協議を進めることになり、最終的には墳丘から離れたところから進入してくるように決着した。

しかしながら、宅地予定地については協議の結果、場所の変更ができないことになったため、快天山古墳の推定範囲からはわずかながら外れているものの、関連施設の所在等が懸念されることから試掘調査を実施することになった。

調査は、快天山古墳に最も接近している部分からトレンチによる試掘を実施した。尚、トレンチ設定については、人力により実施したかったのだが、調査地が開墾によりかなりの盛土であるとの話であったため、作業量と安全性を考慮した結果、重機による掘削を実施することにした。

４．調査結果の概要

開発予定地内での遺構確認調査を実施するにあたり、まず快天山古墳の範囲及び関連施設がこの地まで広がっているのかいないのかを確認するため、快天山古墳に最も接近している部分からトレンチによる試掘調査を実施した。

調査地の現状は、畑となっており当時の地形を考えると、北西から南東にかけての下り勾配となっていたことが周囲の地形から推察することができる。さらに、中央部付近から南にかけては、傾斜が激しくなっていることを考慮すると遺構の分布の可能性は極めて低いと考えることができる。

このことから、試掘トレンチは快天山古墳の所在する尾根に面する北西側を中心に設定することにした。

以下トレンチ毎に状況を記述する。

〔１トレンチ〕

前述で記したように、まずは快天山古墳に最も接近しており、地理的にも当時の地形が残存している可能性が最も高いと思われる部分から調査を進めるということで、１トレンチは快天山古墳の後円部が最も張り出している部分に接近している位置にほぼ東西方向に2.0m×9.6mのトレンチを設定した。

上層部は、近世以降の埋土で覆われており、地表下約40cmのところで快天山古墳のものと考えられる埴輪片を含む層を検出した。快天山古墳の周溝の可能性があるとして期待して調査を進めたが、その直下には弥生土器片を含む層が堆積しており、その下部は地山となっていた。

地山の立ち上がり部分を検出すべくトレンチを東に延ばしてみたが、結果として地山は立ち上がることなく急激に下っていた。

後の時代に掘削を受けている可能性もあるが、出土した埴輪片等を観察してみると磨滅が著しく１片あたりの大きさも小さいことから、この包含層が遺構内の堆積土であるとは考えにくい。

弥生土器片については、中期後半から後期にかけての所産と考えられる甕の底部で、快

天山古墳が築造される以前にこの付近に小規模ながら集落が開けていたことも考えられるが、遺物もこの１点のみであること、遺構については確認できなかったこと等から、残念ながら詳細な内容までは摑みとることができなかった。

〔２トレンチ〕

１トレンチの観察により、遺物包含層が南面の壁までは広がっていないことから１トレンチ以南には包含層の分布が考え難いが、確認するために調査対象地南西端に3.0m×6.3mのトレンチを設定した。

１トレンチの地形と似ており、地山はテラス状の平坦部が若干ありその後急激に下っていた。

１トレンチのように明確な包含層は確認できなかった。しかし、ごく微量ではあるが埋土中から埴輪片及び古代遺構の土師器片を採取した。遺構はまったく確認できなかったことと多時期の遺物が混在していることから、後の時代に掘削等を受けた時の混入であると考えられる。

〔３トレンチ〕

調査区南部の状況については１、２トレンチよりほぼ把握することができたので北部の状況を確認するべく１トレンチの北東部に1.3m×3.4mのトレンチを設定した。

内容は、地表直下より地山が現れ、遺物、遺構ともに検出されなかった。

〔４トレンチ〕

１トレンチで検出した遺物包含層の分布範囲を確定するため、１トレンチと３トレンチの中間に3.4m×3.8mのトレンチを設定した。

結果、トレンチ南西端でわずかに埴輪片包含層を検出することができた。その他の部分については、遺物、遺構とも皆無であった。

５．まとめ

調査地は、横山から派生する尾根の最南端に位置し東西には大東川及び綾川両水系により開かれた平野部を見下ろす位置に所在する快天山古墳の後円部の東裾に隣接する丘陵中腹に位置する。

快天山古墳は、昭和25年、26年と２度にわたって発掘調査が実施されているが、主体部の調査が主で墳丘の規模については、円筒埴輪列が見つかったことから後円部径65m、前方部35mとされている。しかしながら快天山古墳については、二段構築であるとの考え方もできることからこの埴輪列が墳丘のどの位置に設置されているものかが確認されていないこと及びテラス、周溝等の墳丘端施設が確認されていないので本来の墳丘規模を確定するまでには至っていない。

そのような状況の中で、今回の開発計画があったので試掘調査の実施に踏み切った。

調査の結果、４本のトレンチによる試掘を実施したが、遺構の確認はまったくできなかった。しかしながら、１トレンチから４トレンチにかけて調査地西端部に約６㎡であるが埴輪片等を含む遺物包含層の分布を確認することができた。

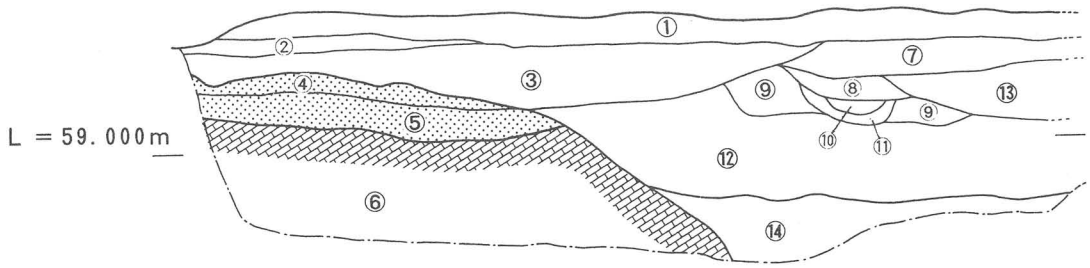
埴輪片については、個数こそまとまって検出されているが、磨滅状態等から、快天山古墳がかなり接近した位置にまで及んでいると思われるがこの包含層を遺構の堆積土とは考えられない。

地山の南東部への落ち込みについては、以前この地が小規模の水田であったため、当時の畦法により掘削を受けているようである。しかし周辺の地形を考慮すると、当時からある程度の勾配はあったと考えるのが自然である。

これらのことから、包含層を検出した付近についてのみ保護範囲とし、その他の範囲については開発を許可した。

発掘調査の報告については、平成９年７月７日付け、綾歌教委発第２８９号にて提出した。

第３図　１トレンチ土層実測図（北面）　（S＝１：５０）

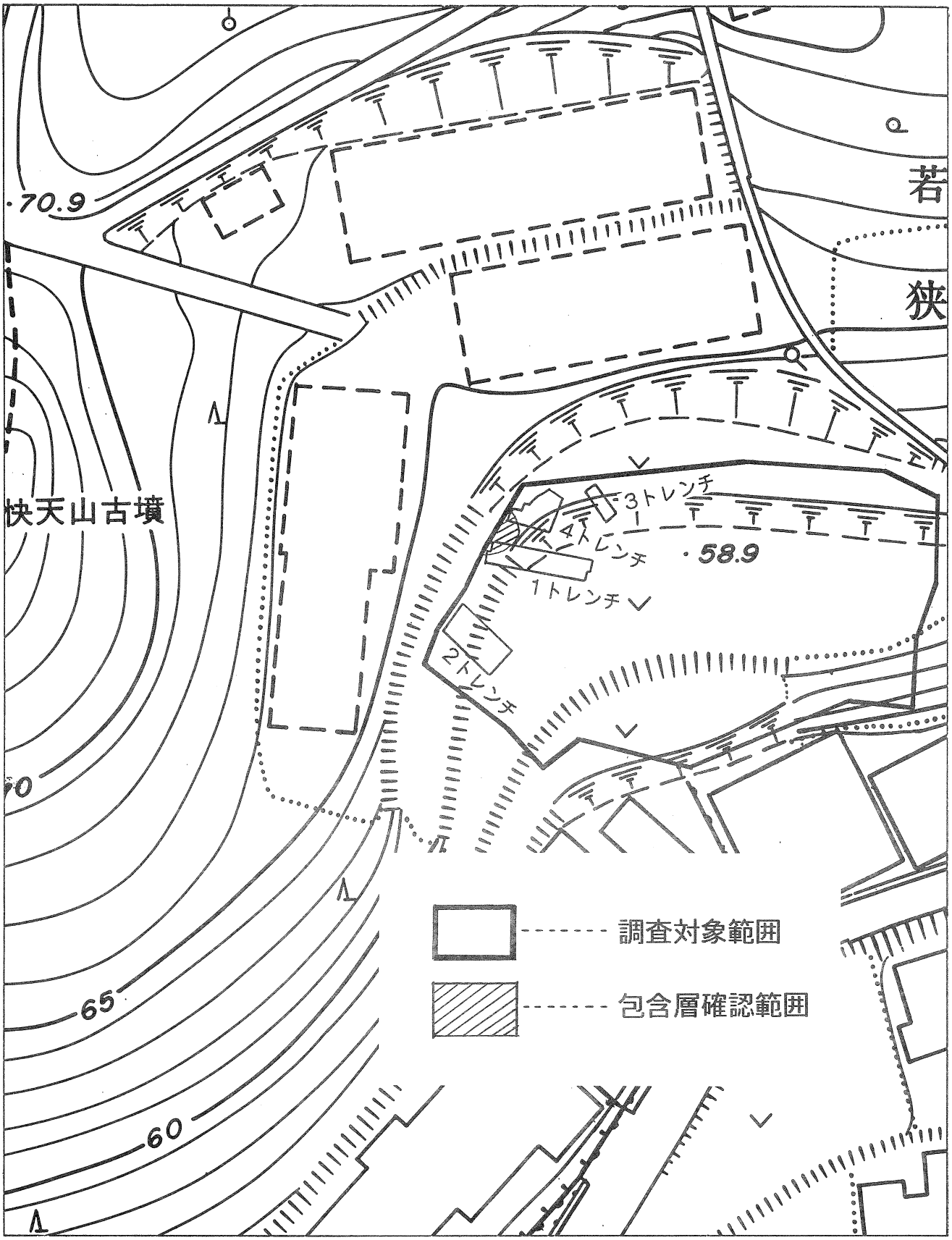


①灰黄色土
②暗灰黄色土
③灰褐色土
④暗灰色土（やや粘質）
⑤暗灰色土（やや砂質）
⑥暗灰褐色土
⑦灰褐色土
⑧暗灰褐色土
⑨暗灰褐色粘質土
⑩褐色粘土
⑪灰褐色粘質土
⑫暗緑灰色粘質土
⑬黄褐色土
⑭黄褐色粘質土

第１表　１トレンチ土層堆積状況

土　層　区　分	土層番号	包含遺物等
水田耕作土	①	――
近世以降埋土	② ③ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬	――
近世以前埋土	⑭	土師器片
包含層（古墳時代前期）	④	埴輪片
包含層（弥生時代中期後半～後期）	⑤	弥生土器片
地山	⑥	――

第４図　快天山古墳試掘調査トレンチ配置図



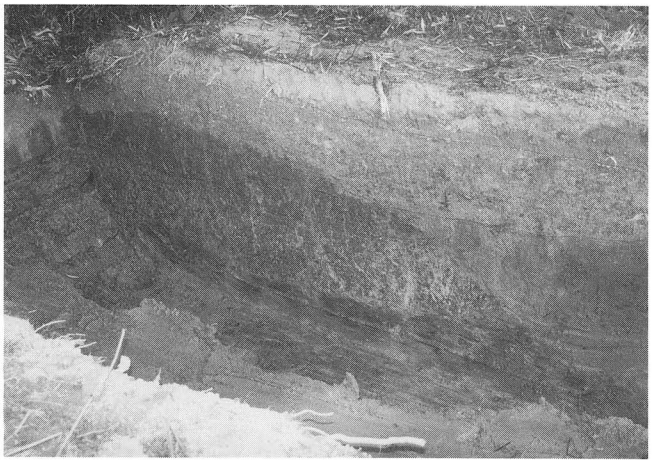
（S＝１：５００）

図版1　快天山古墳墳丘全景（北より）

図版2　1　号　石　棺　露　出　状　況

図版3　試　掘　調　査　作　業　風　景

図版4　包含層検出状況（1トレンチ）



図版5　土層堆積状況（1トレンチ）

図版6　試　掘　ト　レ　ン　チ　全　景

椎尾東遺跡

第Ⅲ章　椎尾東遺跡試掘調査

調査対象地　　綾歌町岡田東１２４６－３，１２４７－２～３
調 査 期 間　　平成９年１１月１５日
調 査 面 積　　５７．６㎡

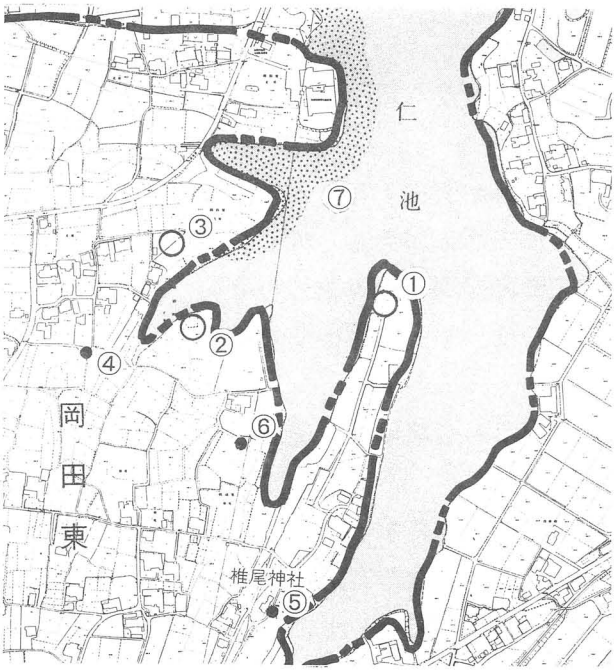
１．地理的環境

綾歌町は、肥沃な丸亀平野の東南部に位置し、阿讃山脈の最前線をなす高見峰、猫山、城山の連山を南限とする。町北東部については、横山連山が南北に延びており平野部からの眺望は遮られている。北西部は土器川沿いの沖積平野に向かい幾筋もの洪積台地が延びており、起伏に富んだ複雑な地形を形成している。

椎尾東遺跡は、この洪積台地上で綾歌町でも北端に所在する仁池に流れ込む河川の中央に挟まれた丘陵の先端に位置する。

この椎尾東遺跡とほとんど地形を共にする仁池周辺には、時期こそバラエティーに富んでいるが先人の手によって様々な遺跡が残されている。

町中央部より東部については、南方の連山に源を発する大束川水系により盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。



①椎尾東遺跡
（弥生後期～古墳初頭）
②椎尾遺跡
（弥生後期）
③北原遺跡
（弥生～古代）
④北原古墳
（古墳中期）
⑤椎尾古墳
⑥椎尾塚
⑦須恵器等散布地

第５図　周辺の遺跡分布状況（S＝１：１０，０００）

２．歴史的環境

綾歌町では近年の発掘調査により、平野部で縄文時代晩期の集落遺跡に伴う遺物が発見されるようになってきたことから、少なくとも３，０００年前頃には人々の生活が行われていたことが分かってきた。

弥生時代になると、行末遺跡に代表される前期集落遺構が各地で確認されているほか、

後期には次見遺跡や下土居遺跡また近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡でも集落遺構が発見されている。このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が形成されたり、石塚山古墳群の所在する丘陵先端部では、佐古川・窪田遺跡より弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造されている大規模な周溝墓群が確認されている。

古墳時代に入ると町の西部では岡田台地上に岡田万塚古墳群、北原古墳のように多種多様な古墳が築造されていたり、東部では快天山古墳、陣の丸古墳群、横山古墳群、横峰古墳群等の築造、集落遺構としては行末西遺跡、佐古川遺跡等が確認されている。

特に弥生時代後期から古墳時代にかけては、遺跡の密度も高く非常に栄えていた時期であることが伺える。

古代では、規模は確認できていないが原遺跡、北原遺跡より集落遺構が確認されている。

中世に入る頃には坂出市との境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造され、後半期に入ると南部連山の城山に西長尾城が築城される。

西長尾城は、三野郡詫間郷筥御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認められた長尾大隅守元高が応安元年(1368)城主となり天正13年(1585)の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族により守られてきた城である。

その間に長尾一族はこの地で勢力を伸ばして炭所、岡田、栗隈などに城を構えて阿野、鵜足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

3．調査に至る経緯

綾歌町岡田東北原及び椎尾地区で平成６年度頃から香川県の実施する緊急農道整備事業の路線計画がなされてきた。

この付近には、北原古墳、椎尾古墳等の墓跡が所在することや仁池の内堤でも須恵器片等の散布が確認されていることから集落遺跡の所在が考えられていた。

このような要因を背景に開発計画に先立ち発掘調査を実施した結果、これまでに弥生時代から古代にかけての集落跡である北原遺跡及び弥生時代後期の竪穴住居を主体とした椎尾遺跡を相次いで発見している。

その後、農道整備事業の着工に伴い綾歌町でも当該事業に関連した仁池の一部を埋め立てて公園を整備する計画がなされた。

この計画に伴い池の代替施設として浚渫工事を実施することになったため、町教育委員会では平成９年８月１日付けにて『埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて』の照会を受けた後に遺構分布確認のための体制を整えていった。

現地は、仁池南部から中央部へ張り出した尾根の先端で、水田として利用されていたため、試掘調査については稲の収穫が終わってから実施することにした。

試掘調査は、仁池が貯水体制に入り、貯水量が満水になってしまうと調査予定地が浸水してしまうことから稲の収穫後直ちに実施することにし、調査期間についても平成９年11月15日のみで行った。

今回の調査は、これまでに遺跡の分布について全く確認されていない地区での実施となったことから 2,478㎡に及ぶ開発区域全域について重機掘削によるトレンチ調査とした。

なお、発掘調査の報告は、平成９年11月19日付け綾歌教委発第439号で提出した。

4．調査結果の概要

今回の調査では、これまでに遺構等の確認がないものの近年に実施されている周辺の発掘調査の状況から考えると集落遺跡が所在している可能性が非常に高いとして、分布状況の確認のために試掘トレンチを全域を対称に合計７本設定した。

それぞれのトレンチの内容については下記のとおりである。

第２表　試掘トレンチ総括表

トレンチ名	大きさ（m）	内　　容　・　特記事項
１トレンチ	0.9× 8.3	遺　構・・・竪穴住居（１棟） 大きさ・・・１辺３．６m、深さ２５cm 構　造・・・ピット、炉跡、壁溝 遺　物・・・土師質土器片 時　期・・・弥生時代後期～古墳時代初頭
２トレンチ	0.9× 6.8	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無
３トレンチ	1.0× 8.4	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無
４トレンチ	0.8×12.0	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無
５トレンチ	0.9× 9.0	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無
６トレンチ	0.8×12.0	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無
７トレンチ	1.0× 7.7	遺　構・・・皆無 遺　物・・・皆無

試掘調査の結果、まず最初に設定した１トレンチの南半部から竪穴住居を検出した。上層は古代以降に削平を受けているようで包含層が全くなく、構造について不明な点が残るが大半は残存していると考えられる。

竪穴住居の埋土中に土師質の土器片が微量ではあるが包含されているが、時期等について決定付けるような資料ではなかった。

また、埋土の大半が焼土を含んでいることから、この竪穴住居は焼失したものと推察することができる。

さらに、竪穴住居の南部については床面まで掘り下げることにより壁溝及び柱穴を確認することができた。このことから考察すると、この竪穴住居はほぼ１辺3.6mの方形で４支柱構造となっているようである。

次に、この竪穴住居に関連した遺構が分布している可能性があることから、まずこの仁池に向かって張り出した尾根を横断するようにトレンチを配置していった。

この結果、結論から述べると遺構の分布は確認できなかった。

全体に地山まで掘り下げてみたが、１トレンチで検出した遺構と関連する土層の堆積も

まったくなく、当時から分布していなかったのか後に削平等の破壊を受けて消滅したのかは伺い知る術もないが、現状としては埋蔵文化財包蔵地とする資料を得ることができなかった。

5．まとめ

今回の試掘調査では、調査に際しての地権者との協議により、一部調査のできなかった部分があるが、7ヶ所に設定した試掘トレンチの内、1トレンチから竪穴住居跡を1棟検出することができた。

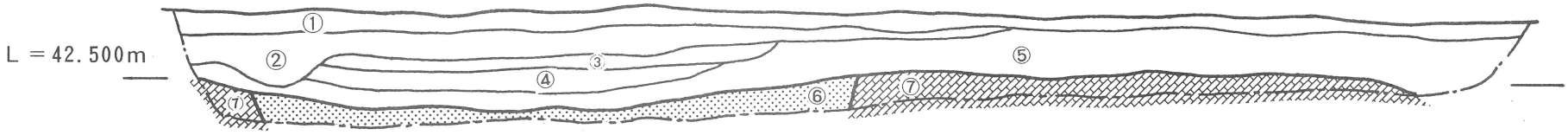
包含遺物が非常に微量であったことから詳細な内容までは摑みとることはできないが、出土した遺物が土師質であること及び竪穴住居の構造、また同一遺跡として扱ってもいい程の位置に所在する椎尾遺跡の内容等から考察してみると、この竪穴住居が建造されたのは、弥生時代後期から古墳時代初頭までのものであるようだ。

竪穴住居の内部については、必要以上に掘り下げなかったため構造の内容についても詳細は分かっていないが、ピット内の埋土等焼土を多量に含んでいることから考察すると、火災を受けている可能性が非常に高いと思われる。

他のトレンチからは、遺構、遺物共に検出されなかったことから、この遺跡の分布規模をはかり知ることができなかった。

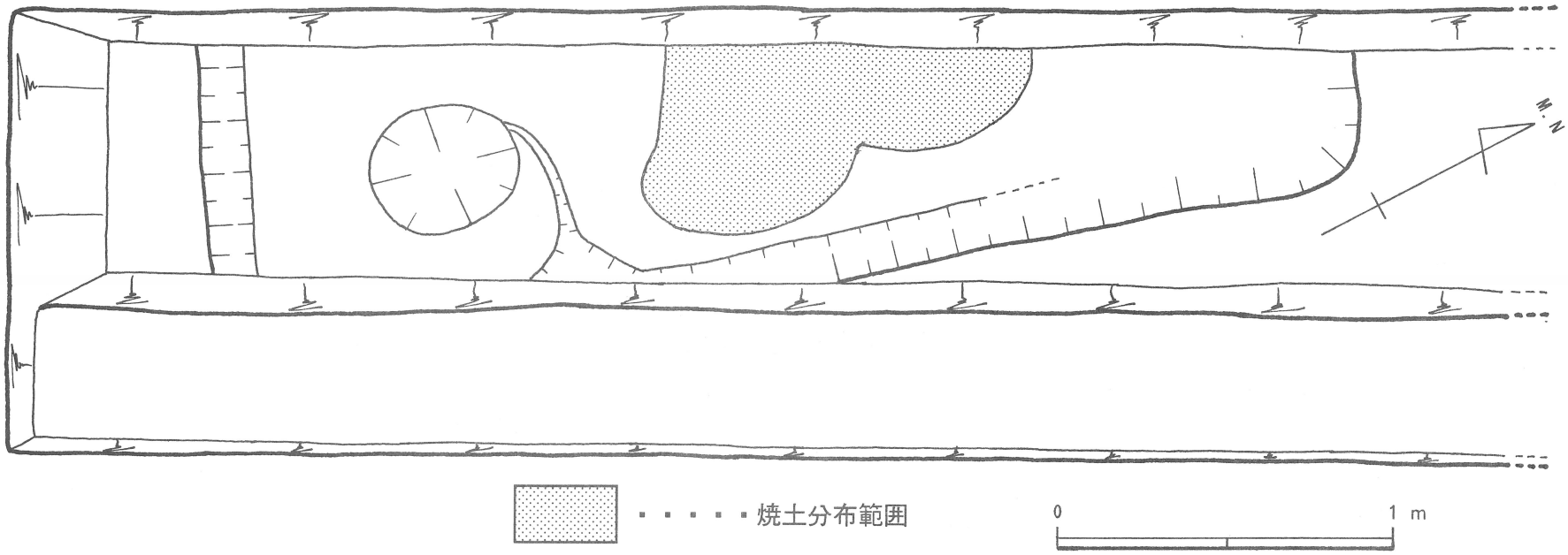
これらのことから、今回の調査で発見した椎尾遺跡の取扱いについて、1トレンチ周辺及びその東に隣接する今回地権者との協議により調査できなかった部分について約207㎡については保護措置必要範囲として、平成9年11月19日付け綾歌教委発第453号にて開発側に回答した。

第６図　１トレンチ土層実測図（S＝1：40）



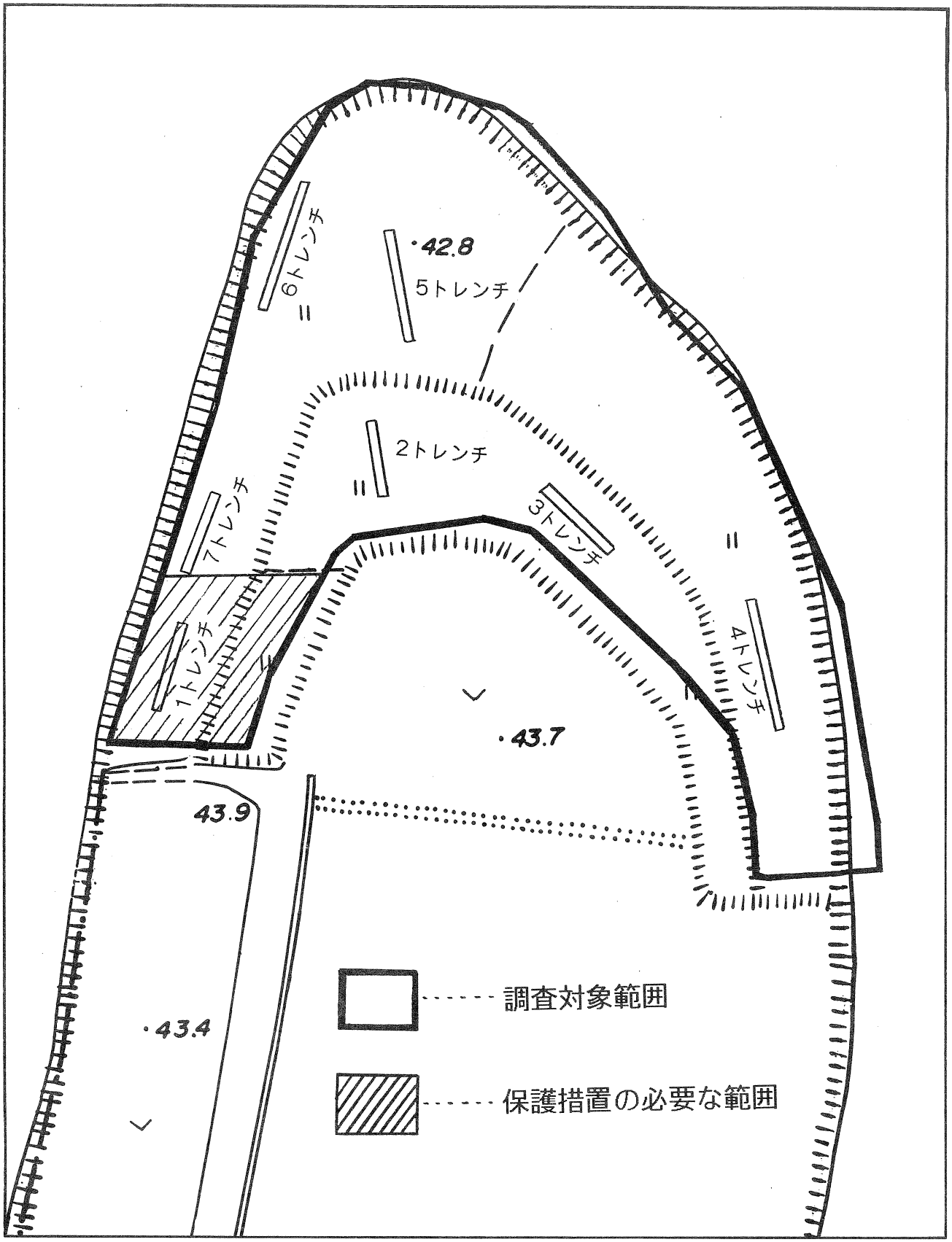
①暗茶灰土（水田耕作土）
②暗灰黄色土
③暗灰粘土
④暗褐色土
⑤暗黄色土
⑥暗茶褐色土：竪穴住居（弥生後期～古墳時代初頭）埋土
⑦褐色土（地山）

第７図　１トレンチ平面略測図（S＝1：20）



・・・・・焼土分布範囲

第８図　椎尾東遺跡試掘調査トレンチ配置図



（S＝１：５００）

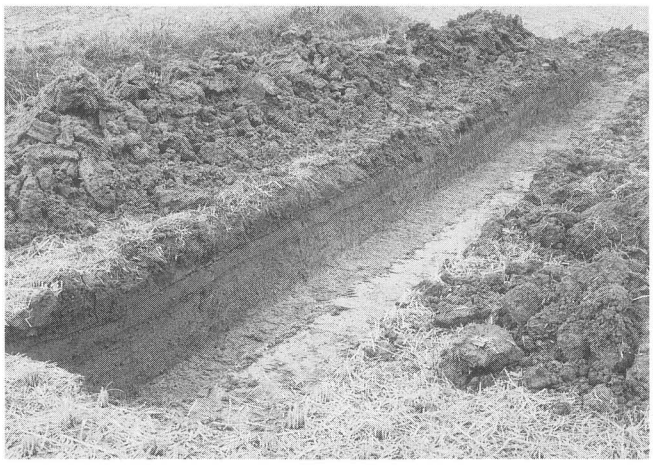
図版７　試掘調査作業風景（６トレンチ）

図版８　竪穴住居検出状況（１トレンチ）

図版９　１　ト　レ　ン　チ　全　景

図版10　１トレンチ土層堆積状況

図版11　竪穴住居焼土分布状況



図版12　４　ト　レ　ン　チ　全　景

西 長 尾 城 跡

第Ⅳ章　西長尾城跡測量調査

調査対象地　　綾歌町岡田上２３１２－１０，２３１２－１３
調 査 期 間　　平成１０年1月２３日～3月8日
調 査 面 積　　１，２１０㎡

１．地理的環境

綾歌町は、肥沃な丸亀平野の東南部に位置し、阿讃山脈の最前線をなす高見峰、猫山、城山の連山を南限とする。町北東部については、横山連山が南北に延びており平野部からの眺望は遮られている。北西部は土器川沿いの沖積平野に向かい、幾筋もの洪積台地が延びており起伏に富んだ複雑な地形を形成している。

町中央部については、南方の連山に源を発する大束川水系により盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

西長尾城跡は南部の連山の中でも西端に位置する標高375.2mの城山(Siroyama)丘陵部に位置する。頂上からの視野は、東部については城山と同じ丘陵に連なる猫山、高見峰により視界を遮られるが、その他の方位については広く眺望することができる。

また、城山の南、西、北面は急峻な要害地形をなし、丘陵尾根や斜面上部を加工し郭等の防御施設を配している。

２．歴史的環境

綾歌町では近年の発掘調査により、平野部で縄文時代晩期の生活用土器が発見されるようになってきたことから、少なくとも３，０００年前頃には人々の生活が行われていたことが分かってきた。

弥生時代になると、行末遺跡に代表される前期の集落遺構が確認されている。後期に入ると次見遺跡や下土居遺跡また近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺構が発見されている。このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が形成されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で最古級の周溝墓群が発見されている。

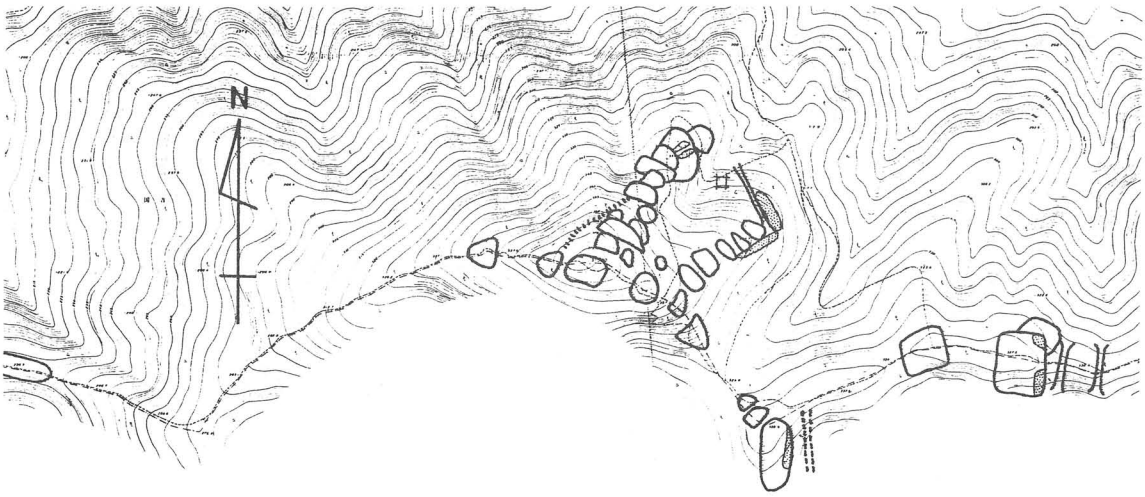
古墳時代に入ると町の西部では岡田台地上に岡田万塚古墳群、北原古墳のように多種多様な古墳が築造されていたり、東部では快天山古墳、陣の丸古墳群、横山古墳群、横峰古墳群等の築造、集落遺構としては行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、佐古川・窪田遺跡が確認されている。

特に弥生時代後期から古墳時代にかけては、遺跡の密度も高く非常に栄えていた時期であることが伺える。

古代には、原遺跡、北原遺跡で集落が確認されている。

中世に入る頃には坂出市との境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造され、後半期に入ると南部連山の城山に西長尾城が築城される。また、集落としては昨年の調査により岡田台地で北山遺跡が確認されている。

西長尾城は、三野郡詫間郷筥御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認め



第９図　西長尾城遺構配置概略図（S＝１：５，０００）

られた長尾大隅守元高が応安元年(1368)城主となり天正13年(1585)の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族により守られてきた城である。

その間に長尾一族はこの地で勢力を伸ばして炭所、岡田、栗隈などに城を構えて阿野、鵜足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

３．調査に至る経緯

綾歌町は、綾歌町岡田上国吉地区から栗熊西平尾地区に至る約250.34ヘクタールを、綾歌町森林公園として整備を進めているところである。この中には城山を中心に広がる中世城郭跡の西長尾城跡の整備に関する計画も含まれており、どのような形で計画を進めていくのかを現在検討しているところである。

西長尾城について記述のある文献もあり、現在西長尾城保存会を中心に研究をしているところであるが、内容の詳細については不明な状態であるので、町教育委員会では適切な調査をし、西長尾城の内容を把握したうえで整備計画を進めていくため、昨年度より平板による測量調査を実施して、基礎資料作成作業にかかっている。

今年度についてもこの事業を継続して実施することになった。

さらに、今回は今後効率のよい測量調査を行い、また後の発掘調査に現在進めている測量調査の結果を活用できるようにするために測量基準点を設置した。

測量調査にあたって、測量調査体制を整えると共に、まず昨年度の調査の反省として西長尾城が綾歌町と満濃町が境界を共にすることから、遺構の内容を確認するためにはどうしても満濃町に立ち入らなければ調査が進められないということで、伐開作業の件も含めて平成10年１月21に高松営林署及び満濃町教育委員会、翌22日には香川県西部林業事務所より立ち入り及び立木伐開についての許可を得た。

この結果、翌平成10年１月23日より本格的に調査に入った。

測量基準点の設置及び基準点測量については、業者委託としたため、まず測量基準点の設置位置について現場にて打合せ及び調整を行った。

その結果、昨年度実施した測量範囲及び今年度、次年度の調査予定範囲について３級基準点を３点、４級基準点を２７点設置したうえで測量を実施することになった。

立木の伐開作業については、地元シルバー人材センターに作業委託をし、平成10年１月25日より実施した。伐開の作業範囲については、本丸から西側の１段下った位置に所在する郭及びその周辺、さらに主郭部分の最前線と考えている第10郭北東に位置する堀切から井戸跡にかけて実施した。

伐開総面積は約3,000㎡程度であった。

平板による測量調査については、昨年同様に数日を除きほぼ調査員と補助員の２名と乏しいスタッフの中、予算の制約もあり広範囲にわたる調査は不可能であることから、伐開を実施した本丸西側の郭とその周辺及び最下段に位置する堀切、竪堀部分に集中して実施することとした。

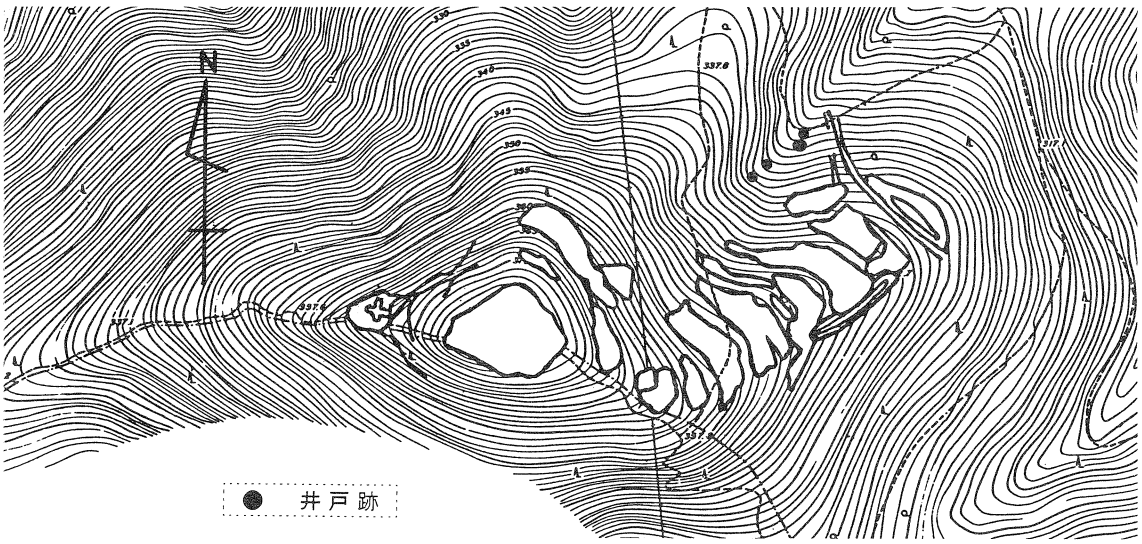
なお、発掘調査の報告については、平成10年１月25日付け綾歌教委発第63号で提出した。

４．地形の概要

昨年度に実施した遺構分布確認測量調査によって約9,000㎡については遺構の分布が確認されている。

山頂部（本丸跡）より北東方向に２筋の稜線が走っており、その東側の尾根上には連郭式郭列が大小合わせて１０段設けられており、東側の尾根上にも同様に連郭式郭列が連なっている。

東側の郭列については、下から３段において南東肩に高さ１メートル、長さ３０メートルにわたる土塁が造られている。このことについて推察すると北からの攻撃に対する防御とあわせて東側についても警戒していると考えられる。



第10図　今回までの調査範囲遺構分布状況　（S＝１：２，０００）

西側の尾根筋との間には唯一の水源となる谷筋があり、４基の井戸が設けられていることから、この水源を守る水の手郭の役目ももっていたものと推察される。

尚、この井戸については積石もみられるが湧き水を汲み上げるのではなく雨水等を溜めるものと考えられる。

郭と郭の段差は概ね２メートル前後で奥行き１０メートル、幅３０メートル程度のものが北東に向かって重なり合うように設けられている。最下段に位置する郭には北東側にも

土塁が設けられており、その下に５メートル程の高低差をつけ、その段下には堀切を設けており、さらにその北側には高さ１メートル弱、長さ３０メートル程の土塁が盛られている。また、堀切は尾根の両法面で竪堀となり城郭の内部と外部を区切るようになっていることからこのラインまでを西長尾城の主郭部とみなしてよいであろう。

西側の郭列については昨年度の調査によって、本丸付近の３段のみではあるが測量を実施しており、その１つについては他の郭とは違い石垣を備えている。この石垣列は、部分的に崩落しているが高さ２メートル、幅13メートルで、その積み石のほとんどが付近で採取したと思われる花崗岩で構築されている。また、石垣列を観察するこによって、用途としては防塞施設としての石垣ではなく、郭を構築した際の盛土等の崩壊を防ぐための土留めとしての役割が主であると考えられる。

この西側の郭列も東側同様尾根筋に相応した連郭式で井戸の付近まで続いている。

今回の調査ではさらに本丸より西側に設けられている郭の測量を実施した。この郭には当時のものかどうかは試掘をしてみないと判断できないが、中央から十字に仕切るようにわずかながら盛土が施されている。また、東辺の南端及び北端からは、犬走り状の通路がそれぞれ設置されていることも判明した。北側の通路については、辿ってみると第５郭（第11図参照）に到達することから第５郭が西長尾城の内部での連絡網として重要な役割を果たしていることが想像できる。

５．まとめ

中讃を一望できる位置に所在する西長尾城は自然の要害地形を巧みに利用し、さらには複雑な防塞施設を備えることにより、より一層強力な防衛力を保持している。

今回の調査の成果を昨年度の実績と合わせることにより西長尾城の構造について着々と解明が進んでいるが、未調査部分が多いことから今後の課題が多く残されるところであるが、次年度以降についても当該調査を継続して実施していくことにより西長尾城についての基礎資料の整備を進めていきたい。

第 3 表　遺構一覧

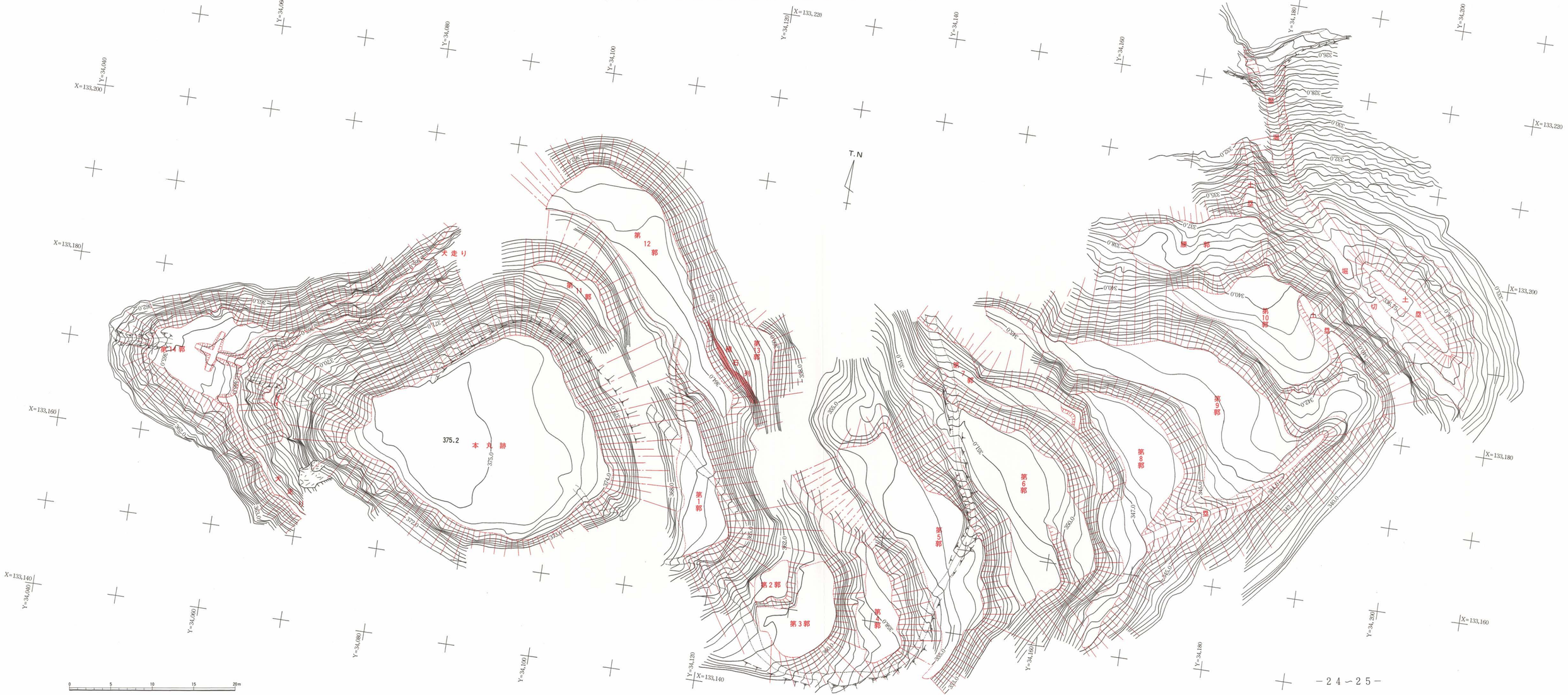
（No.1）

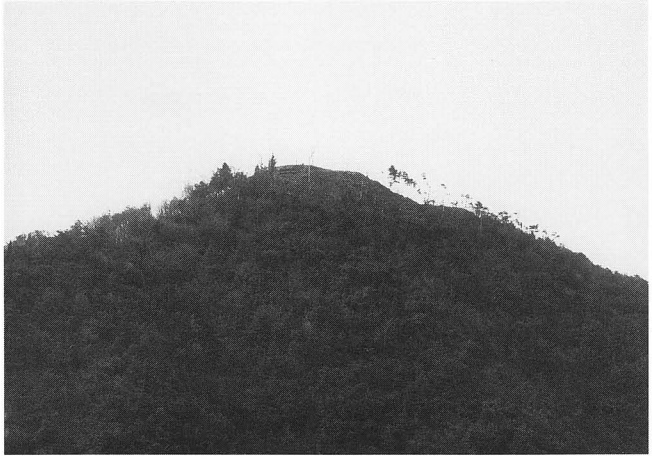
	郭					郭等の付属施設			
遺構の所在地	名称	形状	規模（m）	上段郭との高低差（m）	備考	名称	場所	規模（m）長さ×幅×高さ（深さ）	備考
山頂部	本丸跡	台形	23.0×22.0	——	礎石と思われる石が散布 以前瓦の散布もあった 登山道で一部破壊				
山頂部の東尾根	第1郭	三角形	18.1× 5.2	7.5	登山道で一部破壊				
山頂部の北東尾根（東側）	第2郭	三角形	6.5× 4.0	4.5	登山道で一部破壊				
	第3郭	不定形	12.0× 5.0	0.8	登山道で一部破壊				
	第4郭	不定形	14.5× 5.3	2.0	登山道で一部破壊				
	第5郭	不定形	29.5× 7.8	2.3	登山道で一部破壊				
	第6郭	不定形	30.1× 9.5	2.5	登山道で一部破壊				
	第7郭	不定形	28.8× 2.0	2.3	登山道で一部破壊				
	第8郭	不定形	30.5× 7.2	3.2		土塁	南東肩	28.6× 4.0× 1.0	
	第9郭	不定形	37.0× 8.0	2.1					
	第10郭	不定形	18.0× 8.7	2.3		土塁 腰郭 堀切 竪堀	北東肩 北東段下 北西段下 北東段下 堀切と連続	5.5× 2.0× 0.5 27.6× 7.7× 1.0 16.0× 5.5 30.2× 2.0× 1.5 20.9× 8.0× 3.3	

（No.２）

遺構の所在地	郭					郭等の付属施設			
	名称	形状	規模（m）	上段郭との高低差（m）	備考	名称	場所	規模（m）長さ×幅×高さ（深さ）	備考
山頂部の北東尾根（西側）	第11郭	不定形	13.3× 3.0	4.8					
	第12郭	不定形	33.0× 7.3	4.0					
	第13郭	三角形	11.5× 6.0	2.2		積石列	南西側法面	13.5× 2.0	
山頂部の西尾根	第14郭	不定形	10.5×11.0	9.0	瓦片の散布 登山道で一部崩壊	犬走り	東部南北端	幅1.0	

第11図　西長尾城遺構測量図（S＝1：300）



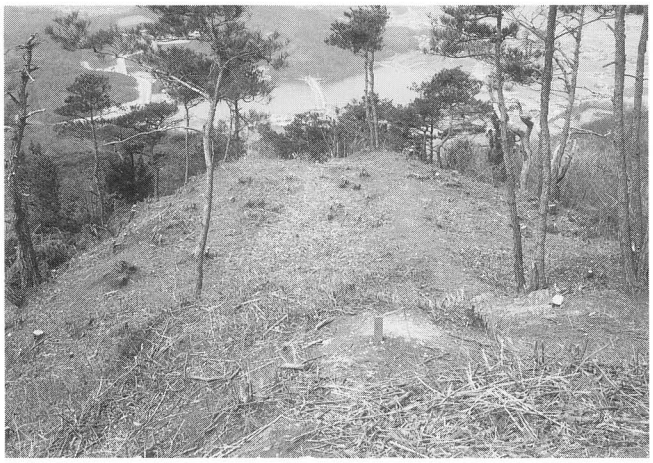


図版13　本丸・第１４郭遠景（北より）

図版14　伐　開　作　業　風　景

図版15　基　準　点　測　量　風　景

図版16　平　板　測　量　作　業　風　景



図版17　第　１４郭　（　東　よ　り　）

図版18　竪　堀　・　堀　切

第Ⅴ章　ま　と　め

綾歌町では、平成８年度から国庫及び県費補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については栗熊東住吉地区快天山古墳、岡田東椎尾地区椎尾東遺跡及び岡田上国吉地区西長尾城跡の３地区を対象に調査を実施した。

快天山古墳は、古墳時代前期に築造された主体部に角閃安山岩製刳抜式割竹形石棺を３基埋蔵する古墳で、このタイプとしては日本最古として著名である。

墳丘規模としても、前方後円墳として考えると墳長100mを測り、築造時においては四国最大級の規模を誇っていることから遺跡の重要性としても非常に高く評価されている。

今回、快天山古墳の東部に隣接する地で個人住宅としての宅地開発の計画がなされたことから町教育委員会では、開発者との度重なる協議の後、試掘調査を実施することとなった。

調査は試掘トレンチを主体とした土層及び包含遺物による遺構分布確認調査で合計４本のトレンチを設定した。

この結果、快天山古墳及びその他に関連する遺構は全く検出されなかったが、調査地の一部で快天山古墳に関連すると考えられる埴輪片を含む包含層の分布が確認できた。

このことから快天山古墳の兆域については、調査地までには及んでいないものの、非常に接近していることが判明した。

また、弥生土器片も包含層から採取できたことから快天山古墳築造以前には、この付近に集落の分布があったと考えることができる。

椎尾東遺跡を発見した岡田東椎尾地区及び北原地区では、香川県の実施する県営緊急農道整備事業に伴う発掘調査によって北原遺跡や椎尾遺跡といった弥生時代から古代にかけての集落跡が次々と発見されている。

今回、同地区で綾歌町の実施する上記事業に附帯する魅力ある農村づくり事業として仁池の浚渫工事を実施することになったため、町教育委員会では当該地区が周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、先に述べたように周辺で集落遺構の確認が相次いでいることから試掘調査を実施することとなった。

調査は、トレンチによる遺構分布確認調査で合計７本のトレンチを設定した。

この結果、調査区南西端に設定した１トレンチ内において竪穴住居を１棟検出した。時期等については、出土遺物の乏しさから特定できないものの、出土した土器片は土師質であること及び須恵器は全く存在しないこと等から考察すると弥生時代後期から古墳時代初等にかけての所産と考えることができる。

他のトレンチからは、近世及び近代のものと考えられる不陸は確認できるものの、１トレンチで検出した遺構に関連するような痕跡は遺物、遺構ともに検出できなかったことから集落の規模について特定することは不可能であった。

１トレンチで検出した竪穴住居の取り扱いについては、今回調査のできなかったその周辺を含めて保護範囲として埋め戻しをおこない、今後開発側と協議を進めていく予定である。

尚、調査期間の制約上、検出した竪穴住居中の埋土の掘削は実施しなかった。

西長尾城跡は、岡田上国吉地区城山を中心に展開する中世城郭として古くから知られており、部分的に後の開発等により破壊されているもののほぼ当時の姿を現在まで伝えている。

綾歌町が実施する町森林公園整備計画を進めるなか、その範囲内に所在する西長尾城跡の取り扱いについて様々な論議が交わされているが、西長尾城跡がどのように分布しているのかについての十分な資料の整備ができていなかったことから、協議もなかなか進まなかった。

そこで町教育委員会では、昨年度から西長尾城跡の遺構分布確認調査を実施し、基礎資料の作成にとりかかっている。

調査は、平板測量による遺構分布確認調査で、今年度は本丸西側の郭付近と西長尾城跡の最前線であると考えられる堀切、竪堀付近の合わせて1,210㎡の測量を実施した。

さらに今回は、委託により測量基準点を30点新設、また昨年度の調査に使用した図根点を84点測量したことによりより正確な測量及び成果を後の活用に活かせるようになった。

尚、新設基準点の設置範囲については、昨年度の調査範囲、今年度の調査範囲そして来年度の調査予定範囲とした。

今回の測量調査の結果、本丸から北側については昨年度の調査により尾根上に連郭式の郭列が連なっていることが確認できているが、西側についても郭の所在を確認することができた。しかしこちらについては、他のように連郭式にはなっておらず本丸から９m程下ったところに１段のみの構成となっていた。それ以下については、踏査をおこなったが、地形が急峻であること及び岩盤が露出していることから遺構の所在はないと判断してもよいと思われる。

この郭からは、本丸の南北にそれぞれ回る小道が設けられていることが確認できた。当時のものかどうまでの確認ができていないので詳細については不明であるが、北側の小道については第５郭に辿り着くことから、第５郭を主要郭として本丸付近への連絡用通路として利用されていたものと推察できる。南側の小道についても主要郭に辿り着くための連絡用通路としての用途があると考えられる。

また、最下段の堀切部分の調査によって、尾根上を寸断した堀切は竪堀となって両斜面に続くことも判明した。

以上、今年度は上記３遺跡の調査を実施した。快天山古墳、椎尾東遺跡については開発を伴う調査として実施した。また、そうでないものとして西長尾城跡の調査を実施した。

西長尾城跡については、次年度以降も継続的に調査を進め、早い段階で全体像を摑めるような資料づくりをしていきたいと考えている。

今後、当該事業を実施していくうえで、この調査で得た成果を効率的に活用していきたいと考えている。

また、開発計画のある時には、この調査成果に基づき、遺跡の保護について開発側に的確に提示するとともに事前協議を進めていきたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき　はっくつちょうさ　ほうこくしょ				
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書				
副書名	平成９年度国庫補助事業報告書				
巻次	１９９８．３	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第２集
編集者名	綾歌町教育委員会　主事　近藤武司				
編集機関	綾歌町教育委員会				
所在地	〒761-2492　香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638　　ＴＥＬ0877-86-5963　ＥＸＴ234				
発行年月日	１９９８年３月３１日				

頁数	例言・目次等	本文	図版	総頁
	５頁	２５頁	１８枚	３３頁

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
かいてんやまこふん 快天山古墳	綾歌町栗熊東字若狭911-1	37384	00003	34度14分8秒	133度53分37秒	1997.07.05～1997.07.06	1000	個人住宅建設
しいおひがしいせき 椎尾東遺跡	綾歌町岡田東1246-3 1247-2,3	37384	00172	34度13分52秒	133度52分26秒	1997.11.15～1997.11.15	2478	県道附帯溝渠工事
にしながおじょうせき 西長尾城跡	綾歌町岡田上2312-10,13	37384	00035	34度12分1秒	133度52分11秒	1998.01.23～1998.03.08	1210	遺跡分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
快天山古墳	古墳	古墳（前期）	無	弥生土器片 埴輪片 土師器片	
椎尾東遺跡	集落	弥生後期～古墳初頭	竪穴住居	土師器片	
西長尾城跡	山城	室町	郭 堀切 井戸 土塁	瓦片 土師器片	

平成９年度国庫補助事業報告書

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成10年３月31日

編集・発行　綾歌町教育委員会
綾歌郡綾歌町栗熊西1638
電話(0877)８６－５９６３
印刷　四国工業写真㈱